

いらくぎの棘

えのころ草が金色になった空き地で
女の子は小説を読もうとした

ライムギパンに梅の実のジャムをぬって
すきまにクリームチーズを挟んだ
紅茶にはりんごの皮を何枚か入れて
ただしく彼女の午後は完璧だった

しかし彼女はイヌタデを知らず
ハナミョウガの実も
ツワブキの黄色い花も知らない
まして

一輪の花に永遠をみるなどといった詩人の妄言や
武蔵野をさすらった鉛毒の苦惱も
彼女にはなんの魅力もないのだった

ただえのころ草の
猫の尻尾のようなふくらみが
彼女の文学的な行き詰まりをくすくすするのみだ

浮島

やぶ枯らしの絡む孟宗竹の林にも
哲人は住まない
幸いよあれと人は無責任にいう
それは誤謬だ

種をこぼす鶏頭の花もなく
あざみの紫も
軒下の苔の生殖も
人を悩ませるだけだ
彼女の午後はしだいに傾いていく
その傾斜に幸いよあれ

野草三首

草を食べほらそこらへんにいくらでも涙を拭いたら確認できる
まずかるう今の君にはふさわしい緑が眩しすぎるんだらう

摩天楼のてっぺんに根をはれば野草も偉いとても寂しい

清水らくは

無責任 三十三号

責任者 清水らくは

副責任者 浮島

発行 無責任 zone

発効日 二〇一四年十一月一日